

# 沖

10  
2021

俳句雑誌 [215]



# 潮傷み

能村 研三

## 破笠の芭蕉像

俳人協会は本年創立六十周年を迎えるのを記念して「俳人協会所蔵の名品展」の図録を作成しているところで、担当の専門職員という話す機会があった。

その中で我が家に伝蔵されている破笠（はりつ）作の芭蕉像の話に及んだ。破笠は芭蕉の弟子の一人で漆芸家、肉筆浮世絵を描いたことでも知られている。国語の教科書等でお馴染みの芭蕉像はその多くを破笠が描いたものとされている。

我が家にある芭蕉像については、先師登四郎の遠縁のおじにあたる山本安三郎の子供の川合家の伯母からの遺品として送られたものである。山本安三郎は登四郎が生まれた谷中清水町で医師をしていて、登四郎に俳句のほどきををし、「曾良の随行日記」を発見した人でもあり、登四郎に大きな影響を与えた人物である。山本家、川合家は共に現在在途絶えてしまったが、近年川合家の墓を能村家の墓に合体し祀っている。

この度、協会の専門職員が国会図書館に向き、この芭蕉像について

余所の子がゐる池僕の夏休  
晩夏光結び目美しき舫ひ綱  
熱戦の判官鼻肩ところてん  
潮傷みせし風鈴の音を愛す  
磨り溜むる墨の香ほのか夜の秋  
ゆく夏のしづかに速き持ち時間

大正五年に山本安三郎が書いた貴重な文章を見つけてくれた。

「建築工藝誌」という本の中で「小川破笠と其作芭蕉翁像」という題で書かれたかなり長い文章で、私の家の芭蕉像と同じ写真が掲載されていた。いずれ機会があれば、国会図書館に許可を得て、「沖」にも掲載したいと思っている。

安三郎は「笠翁の芭蕉像は他の陶像とは違ひ、十年餘も親しく師事して、常に其左右に侍し、芭蕉の風貌性格を知悉して居り、殊に敬虔の念を以て、其陶像を作ったのであるから、単に風貌写した而已でなく、其精神をも写し出して居るものである」と思ふ」と述べている。

破笠は三三歳の時に芭蕉は五一歳で亡くなっているが、芭蕉像の芭蕉はおそらくは四十代の頃の風貌が模したものとされている。

こんな貴重な資料が出てきたことに驚いたが、これを機会に破笠のことや山本安三郎についても、もっと勉強してみなければならぬ。

白桃は水をはじきて夜のジャズ  
厄日来て指に確かむ鍵の形  
括りても括りても萩抗へり

晩夏光顔失ひてすれ違ふ  
 雁渡し夕餉の早き漁師町  
 ひぐらしの埧塙に村の老いにけり  
 とんぼうにとことん好かれベレー帽  
 白亜紀の地表を来たる鬼やんま  
 入り口も出口も曼珠沙華盛ん  
 ひと口は銀漢に噴くウオツカかな

稲刈りが済んだ田圃の畦に曼珠沙華が咲き出した。区画整理された田圃に、景観上のごとで市が奨励していることもあり、咲き揃うと見事である。私は村はずれの墓地の周りで、朝に鳥が騒いでいると、「今日は鳥鳴きが悪いから火の用心」と、ふれ回る婆さんがいたような所で育った。それだけに曼珠沙華も不吉な花という気持ちだった。

それがどうして、登四郎先生の沖創刊の〈曼珠沙華天のかぎりを青充たす〉の句以降は、華やかな花と変わったのである。それ以来、曼珠沙華の名所を訪ねたり、様々な地で花を眺めた。ここ数年では我が家の門の前、思わぬ所に地面から両手を突き出すように、瑞々しい茎が出現する。そうなるとポストに朝刊を取りに行く度に見つめることになる。そしてやがて花に疲れが見え始め、紅が掠れてゆく様に滅びの寂しさを感じるのである。

## 蒼茫集

片白草

大畑善昭

\*若き悼 鈴木良戈さん日の良医と愚僧どぢやう鍋  
 東京の地下鉄深く深く夏  
 濃茶なり片白草も活けられて  
 炎昼の鴉赤子の声を出す  
 底紅やどこの誰とも会はざる日  
 蟬の木と家族七人わが暮し

秋 冷

辻美奈子

\*露草の青を全き青と思ふ  
 薬研の溝に秋冷の深みあり  
 鳴子張る村の真中の電波塔  
 蜉蝣の翅脈のごとく光る  
 失せ物を探すが如く秋の蝶  
 蟋蟀や星のおもてのいつも濡れ

見えぬ道

千田百里

踏み入らねば見えぬ道あり芒原  
喩ふればわが世風船葛かな  
潮騒は葉月の楽か一遍忌  
箱庭まで探るよ夫の失せ眼鏡  
\* 夫といふをとこのふしぎ水澄めり  
木歩忌や籠りて秋の声を聴く

風の十字路

栗原公子

\* 四阿は風の十字路小鳥くる  
遊びづる風に縫りてゐる晩夏  
涼新た白き卓布に糊きかせ  
帯なせる潮目の翳り秋近し  
白墨の手書きのメニュー―巴里祭  
梅雨明くるアナフライキシ―無しにちよん

活字の森

大沢美智子

喫泉にうみどり群るる巴里祭  
\* 図書館てふ活字の森にゐて涼し  
縄文の森天蚕の息づくよ  
沼風に草笛鳴らす宗吾の地  
いなびかりシェルターめける屋形船  
八月十五日逆光のねこじやらし

晩夏光

七種年男

勝ち牛の島蹴り上げて隠岐晩夏  
睡蓮のひかり畳みて眠りけり  
川石に残る焦げ跡夏の果  
島の坂みな直線や晩夏光  
故郷は風湧くところ稲の花  
\* 玄海のがつんと釣瓶落しかな

# 潮鳴集

猪牙舟

平松うさぎ

オリンピックの魔笛操るは炎帝  
螻蛄の声消ゆるあたりの土湿り  
猪牙舟の艚軋む音よ夕涼し  
金魚絵の帯泳ぐやう藍浴衣  
土用干愛とふ手間を繰り返す

遠花火

川高郷之助

\*聞きたきは聞き難きこと遠花火  
深々と古寺燦々と百日紅  
晩成の大器を持たず冷奴  
ふるさとの夏野や父の匂ひして  
喜寿にして新しき夢青葡萄

絵地図

諸岡和子

創世記の天地はかくや雷激し  
トマトの香総身に沁みる脇芽かき  
\*古き街の絵地図に焦げ目パリー祭  
星の婚ベールはからすうりの花  
水注ぐ壘に初秋の目盛線

智 育

安藤しおん

夕顔に溶暗ゆだね路地ぐらし  
文弱の駆けてドン・マイ羽抜鶏  
\*歳時記は智育のうつは星涼し  
天蚕のはじめの一糸空を切る  
秋茄子をじつくりと焼き手捻りに

シーグラス

井原美鳥

海霧走る苦海浄土を思ふとき  
\*西日透くことに紅蓮のシーグラス  
醤油蔵蘇鉄咲くたび煉瓦旧る  
手を置きて知る土の熱広島忌  
貝殻道むかし鱚の荷揚げ道

ガラスの部屋

兵藤 恵

畳掃く音より秋の生まれけり  
八月のまひるの黒き葉瓶  
調香のガラスの部屋や今朝の秋  
星合の空の白んで始発来る  
\*ひぐらしやさみしき時は火を焚いて

神楽坂

栗坪和子

\*神楽坂路地の昔へ水を打つ  
夕焼や懐紙に受くる隠岐の塩  
宿帳に「行脚」とありぬ大夏炉  
メサイヤにはじめとをはり夏の露  
能の家百日紅を高々と

ひと日の杞憂

高久 正

\*水打つてひと日の杞憂遠くせり  
十指まだ自在がうれし袋掛  
樹影濃くつなぐ参道夏旺ん  
若竹のますぐ男の身嗜み  
飴色に透くる空蟬風生まれ

蟬時雨

小田里己

明易の空のどこかに波の音  
サーファーの波の六腑を突き抜ける  
極暑かな誘導員の背曲がり  
\*少しづつ減らす写真や蟬時雨  
八月や慎ましく盛る飯と菜

夢の窪み

森村江風

\*心地良き夢の窪みの籐寝椅子  
光風ぐ海を遠見に稲の花  
向かひ波無心に割つて遠泳す  
木遣唄強面通す生身魂  
梨の名に水の名多し水の星

# 沖作品



## 能村研三選

セザンヌの連作の所思遠青嶺

熊本

河崎 祐二

里村 梨邨

白南風や浩一眺む三角港

\* 白南風や海を傾げて白帆翔ぶ  
梅花藻の川面に雨の降りやまず  
まくなぎや小兵力士の猫だまし  
夜光虫見えざるものの燦めけり

\* 神秘てふ見えぬ法則銀河澄む

市川市

澤田 英紀

市川市

福田 肇

今日想ひ明日思ふ幸大西日

\* 山蛭の足裏ひたひた冷え走る  
一木の蟬にソーシャルディスタンス  
夕立呼ぶ帝釈天の稲妻紋  
攀ぢ上る初蟬に幹こそぼゆし

鏡より影に見惚れしパナマ帽

\* 白玉の浮かぶ器の透きとほる

\* バックミラー故郷小さく虹の中

湯上りの肌の掴みし涼しさよ

\* 炎昼や聖火走らずトーチキス  
二番目の願ひ事書く星祭  
夏書果つ無の字ばかりが上手くなり  
オルゴール緩ぶ窓辺や晩夏光

敗戦の史実はるかや蟬時雨

\* 紙魚の書や征きて還らぬ兄のもの

\* 戦の碑忘れられたりほととぎす

\* はやり歌憂しと聞きをり遠蛙

海に向き悼む心や流れ星

江戸切子白布に映ゆる午餐かな  
諦念は智者の葉箋鷗外忌

千葉

牛島 晃江

千葉

金光 浩彰

\* 地藏盆爺つさも婆つさも出ておいで

今日のこと忘れて明日へ髪洗ふ

火の粉浴び大筒花火の三河衆

白鷺を歩ます水田沼の風

昼寢覚今や生家は甥の世に

山鉾にも鬣屑のありて古都今宵

雷鳴に為す術も無し野外堂

\* 遠き世に繋がる蓮の花大輪

夏の夜や星座詳しき科学好き

いつからか寄る辺なき身に青蛙

片陰へ駆けこむ影と追ふ影と

草引けどころに添はぬ膝がしら

\* 力抜くことの涼しさ肘枕

海昏れて香のきはやかに浜おもと

浜木綿や此処より征きし若き等よ

\* 噴水の組み体操や立ち上る

「爆発だ」太陽の塔雲の峰

蟬しぐれ清澄山の回向かな

足で足洗ふ縁側酔芙蓉

船虫の逃げ足に見るDNA

神奈川県

鈴木 基之

栃木

五十畑悦雄

水谷 昭代

岩手

小野寺東子

浜崎喜美子

千葉

関 妙子

江森 悦子

埼玉

浜田はるみ

東京

頓所 敏雄

一面の青田千枚霽の中  
\* 川一つ海へ突抜け雲の峰  
梅雨晴間小牛の臍に草の染み  
かき氷星の凶鑑を濡らしけり  
雲の峰真正面から押してくる  
遠洋を目指す猟船雲の峰  
\* 丈足らぬ程に育ちぬ浴衣の子  
蚊帳の子に怪談嘶佳境なり  
とぼけ顔して山椒魚の長寿  
\* 草も木も光を弾き走り梅雨  
雨滴みな翠玉となり夏至の森  
新しき浮巢の周り雨躍る  
雨止んで光さざめく風知草  
茅の輪くぐれば無限記号の神の意図  
夏至夕べ白夜を透視するやうな  
鯔はねて風さらなる和なりし  
\* 雲たかだか梅雨に樂日のありにけり  
\* 梅干して星の雫の紅ならむ  
余生なほ老いの一徹百日紅  
禱るより詫びる広島原爆忌  
洗顔の水こそ清し今朝の秋

# 飛鷹選評



能村 研三

神秘てふ見えぬ法則銀河澄む

河壽 祐二

神秘とは日常離れた人間の知恵では計り知れない不思議なもので、神の啓示によって起こりうるものであるとし、人は憧れと魅力を感じてきた。しかしそうしたものにも現代の高度なIT社会においてはず科学的な法則がある筈ではないかと作者は感じた。でもすぐにそのことを解明できるわけでもなく、途方に暮れたようにただ澄んだ銀河を見上げていた。

バックミラー故郷小さく虹の中

澤田 英紀

車の後方の安全を確認するバックミラーが、人間の感情の起伏を映すツールであることを発見したのが眼目。故郷への帰省を終えて運転席に乗り込んだのだが、いつまでも見送ってくれる人の影が次第に小さくなっていくのを感傷的に見つめていた。虹の中に入った故郷は残された人たちがいつも平穏であることを願った。

はやり歌憂しと聞きをり遠蛙

牛島 晃江

森閑とした夕暮れの中、遠くから蛙の鳴く声が聞こえてきた。その鳴き声は耳になれると穏やかな気持ちにさせてくれるが、一方でテレビからは今のはやり歌が流れてきた。歌詞の内容共々音曲も耳障りに聞こえてくる。やはり自然の力はすばらしいと認識した瞬間であった。

白南風や海を傾げて白帆翔ぶ

里村 梨邨

里村さんは館山の方で、明るい夏の房総の海を彷彿させる句である。白南風は、梅雨明け後の空の明るいとときの南風、いよいよからりと晴れた日が続き日差しも強く夏本番だ。海にはこれ待っていたかのようにヨットの白帆が並んだ。

褪せ果つを恐れ凌霄散り急ぐ

福田 肇

凌霄花の「霄」という字は空を意味し、空を凌ぐほど伸びる花である。私の家の隣に咲く凌霄花が毎日のように私の家の私道に散るので掃くのが習慣である。確かに褪せ果てる前に散ってしまうのも凌霄花の美学なのかも知れない。

夏書果つ無の字ばかりが上手くなり

金光 浩彰

夏安居の期間中、経文を書写することを夏書というが、作者は経の中に出て来る「無」の字を何度も書写をした。自らも「無の境地」となり自己の心から一切の邪念を取り払った心境であった。

地藏盆爺つさも婆つさも出ておいで

水谷 昭代

地藏盆は関西が盛んであるようだが、子供が中心になって地藏様を祭る慣わしである。「爺つさも婆つさも」の親しげな子供たちのしゃべり言葉を句の中に活かしたのがよかった。